

戦後思潮考究 「序説」 (四)

中 島 甲 臣

始めに

本稿は、既述『戦後思潮考究「序説」』(一)～(三)の継続であり、当然ながら、その基本姿勢はそれらと同じである。

その要旨は、各国は自国の「国益」を目指して行動している、の一語に尽きる。

国益を強調し過ぎることは危険である。しかし、いやしくも国運に就いて論ずるときは、国益を夢寐にも忘れては

ならない。戦後我国において国益の標榜が悪として捉えられていたのは、対日戦の戦勝国にとって、その方が都合がよかつたらである。

以下に、ほぼ筆者の同感する立言の若干を、一つには後の引用の典拠として、一つには本稿の趣旨の敷衍として、提示する。

『戦争に関する、あるいはその原因や成り行きについての本を、私はいつもむさぼるように読み、私じしんずつと考へつづけた。しかしいつまでたつても十全のこたえは出てこなかった。……それらの熱心な読者であり……しかし私の胸の奥にはつねに「どこか違う。……私の体験した日本及び日本人の歴史とは、どこか食い違っている」という思いが萌えあがるのを避けることはできなかった。

もっと大胆な批評を試みるならば、それらを読むと日本人だけが特別馬鹿で、戦争になると日本人だけが格別残酷なことをする……という読後感を抱かされてしまうのである。人間というものを世界の中で見るなら、そしてわれわれが実際に生きてきた現代史を、冷静に眺めるならば、そんな可笑しなことがあるはずがない。

非常の時にあたつて、ひとつの国家、ひとつの民族は、おしなべてつねに愚かな判断もするし……そうしてヒステリックな振る舞いもする。ただ時代や民族性によって、またその局面によって、具体的な様相にはそれぞれ違いがある。それが事実であつて、もし日本人が決定論的に愚かで残酷だというならば、私たちがそもそも歴史を学びあるい

は歴史に学ぶ必要も、あり得ない。

私たちが生きた「昭和史」から、戦後いつたい何が脱落し、何が失われてきたのか。……それが私の久しい疑問であつた。村上兵衛・国破レテ・サイマル出版会』

『いつの時代でも勝った国は、自分に都合のいい歴史観で、すべての歴史を説明しようとしています。……戦争は、戦勝国にとって都合のいい歴史観をつくるものです。』

「アメリカの対日戦は」民主主義というイデオロギーのための戦争でした。だからこういう戦争の特色として、戦争裁判が行われたわけです。勝ったイデオロギーが負けたイデオロギーをさばいて見せたのです。

つまり、単に勝利者のエゴイズムという一般的な立場以上に、この場合は、それに加えてイデオロギーの戦争でしたから、その歴史再編成の努力は、いっそう激しいものでした。日本人の間には、自信が失われていましたから、戦勝国の歴史観が強制されても、それに対する抵抗力はなかった。そこで日本人は、自分の過去を敵の目で見るようになってしまった。敵の目でみれば日本は負けた方がよかつたのだから、日本は負けたほうがいい戦争を、一億あげて四年間やり続けた世にも奇妙なる国家である、ということになりました。……今日にいたるまであの戦争の実情はじつは十分に解明されていないとぼくは思っています。……西部劇ではあるまいし、戦争には純粹な善玉と純粹な悪玉などはありません。……大体戦争などというものは、歴史の巨大な動きの一コマですから、そこにはいろいろな要因がまざりあつている。簡単にこれを説明することは非常に難しいでしょう。

村松剛・常識のとおらない国・悲劇は始まっている(高木書房)所載。「」は筆者の添加。』

但し村松剛氏の所論の中、『アメリカの対日戦はイデオロギーのため(のみ?)の戦争』と云う立言には、当方異論がある。歴史観の押しつけ、戦争裁判の意義などは全く同感。同様の観点に就いて、本シリーズ(一)で当方の若干の考えが述べられている。

本シリーズで屢々言及して来たように、このような課題の体系的叙述は容易な業ではない。また現在、筆者にはそれだけの「余裕」がない。よって止むなく、将来の体系的叙述の構成分子となり得る「断片」をat randomに綴ることにする。

ある投書

朝日文庫・戦争三に「死者に申しわけない」との標題で、T・U子五十四才、元少国民、として、次のような投書(一部省略)が載っていた。

『……外地でのみならず、沖縄では同胞すら殺している軍隊です。三十代の母親たちに「沖縄戦では米兵に見つから

ぬようにと嬰兒を刺した日本軍」のことを話したことがありました。すると母親たちは「初めてきいた」とびっくりしたのには私の方がびっくりしました。……』

この文章は、筆者には、ある意味では戦後思潮の典型のように見える。元少国民T・U子さんはどのような状況下で三十代の母親たちにこの話をしたのだろう。燦々たる陽光の下の公園で、か、明るい集会ホールで、か。膝には幼児を抱いていたかも知れない。何れにせよ平和な日常時である。何の「説明」もなしに、その様な状況下でこの話を聞けば、恰も悪鬼羅刹のごとき「日本兵」が、今にもその場に乱入し、膝の幼子を銃剣で芋刺しにでもするように感ずるだろう。そうして、日本軍は「沖繩では同胞すら殺している軍隊」であることを納得するだろう。その結果、「三代の日本人の母親たち」にどのような心情が形成されて行くか。正に『日本人は、自分の過去を敵の目で見るようになってしまった……世にも奇妙なる国家である』ということになる。

この様な事態が実際に存在したかどうかは筆者は判定できないが、「仮に」これに類する事態があったとすればその事態に就いての筆者の「説明」は次の通りである。

沖繩には無数の入り組んだ洞窟がある。このことがある意味では沖繩の悲劇を増幅した。沖繩戦末期、民間人を含めて多くの人が洞窟に潜んでいる。アメリカの兵隊は次々と洞窟に手榴弾を投入する。あるいは火炎放射機で焼き払って行く。断末魔の悲鳴が何処そこに聞こえ、それが段々近づいてくる。アメリカ兵はこの洞窟に気付かずに過ぎ去っていくのか、一秒百年の思いで皆息を潜めている。赤ん坊が泣きだした。皆の目は若い母親に注がれる。あるいは同

じ洞窟に潜んでいた指導者……それは「日本兵」でもありうるし、隣組の組長でもあり得る。さらには民間の篤志看護婦の婦長さんかも知れない……が「静かにさせろ」と怒鳴ったかも知れない。思わず彼女はわが子の口に手を当てる。幸いアメリカ兵は気付かず去って行った。ハツとわれに帰った母親の手元では……。この場合、この外にどのような対処の仕方があったろう。「悲劇」としか言いようがない。戦争というような極限状態における行為を平時の感覚でその是非を論ずることは可能であろうか、それに思い至らない「正義観」は空疎である。

「民間人」の戦闘

この場合問題を複雑にしているのは「便衣隊」など正規の軍隊以外の戦闘行為である。「便衣隊」中国で、平服を着て敵地に潜入し、各種の宣伝や暗殺・破壊・襲撃などを行った特殊部隊。北伐から日中戦争にかけて活躍した。三省堂・大辞林」。戦闘行為は殺戮を含む相互の敵対行為であるが、無制限な殺戮を許容しているのではない。戦闘は正規の軍隊同士の衝突であり、仮に敗北した場合でも軍人として、実際にどの程度実施されるかは別として、少なくとも名目的には国際法による捕虜としての待遇を受けることができることになっている。戦闘終了後、その戦闘に従事した正規の軍隊が、戦闘行為自体が、協定に違反したものでない限り、その戦闘行為に関して責任を追求されることは多分無いであろう。純粹に法的に考えた場合妥当であるかどうかは筆者には知識はないが、B、C級極東軍事裁判で、「国際法による捕虜としての待遇」の実施の如何が問責されたのはそれを示している。

ところで正規の軍隊以外の戦闘行為の実行者に対する「保護」は、国際法上どの様に位置づけられているのか。殆ど無きに等しいのではないか。元々「戦争」は、先にも触れたように正規の軍隊同士の間で規定されており、非戦闘員（民間人）に対する攻撃は禁止されている筈である。このことは、当然ながら、同時に、非戦闘員の戦闘行為もまた禁止していることになる。これが遵守されなければ、戦闘員と非戦闘員の区別がなくなり、行き着く果ては、場合によっては戦争当事国（民）のホロコーストにもなりかねないからである。

従ってこの禁忌を犯した場合（平服を着用した場合の軍人・兵士の軍事行為も含む）の処罰は厳格である。例えば日露戦争時、東清鉄道を爆破しようとして失敗し、ロシア軍に逮捕された沖、横川両烈士（二人は、後に「義士」「烈士」と呼ばれ、「民間の軍神」なみの賞賛を受ける）に關してはどの様な処罰が行われたか。『軍人は軍服を着用している限り捕虜の待遇を受けるが、私人に変装した場合は、一般の戦時スパイとして処罰される。この「原則」は、一八七四年の陸戦法規にかんする「ヘブリュツセル宣言」らしい国際的に認められ、現に日本、ロシアや両国の軍刑法にも採用され、処罰は死刑と定められている。『児島襄。日露戦争』。前記両者の場合も、結果は、法規の規程通りであった。

処で先に「大辞林」で「解説」されているように、日本軍は日支事変で、この便衣隊に散々悩まされた。当時筆者は（旧制）中学校の初年級であったが、「戦争」から帰還した「先生」から、城内を巡察するときは、便衣隊か「良民」かは知らぬが、相手からの突然の攻撃に咄嗟の対応できるように、バスケット・ボールなどを入れる編み目の袋に携帯用のチェコ製の機関銃を入れて肩に掛けていたと聞かされた記憶がある。ではこの場合捕虜となった便衣隊はどの

様な処罰を受けるのか。

元々戦争は正規の軍隊同士の間闘行為であると云う考え方は、多分にヨーロッパの近代国民国家間の通念に依存しているのではないか。第一次欧州大戦では、伝えられるスパイ合戦以外にどの程度の非戦闘員の戦闘行為があったのだろう。あまり聞かないような気がする。しかし第二次世界大戦及びそれ以後の戦争では、レジスタンス、ゲリラなどが示すように国民(あるいは人民)全体を巻き込む戦闘になってきたのではないか。ボスニヤ・ヘルツェゴビナの「民族浄化作戦」などにもそれが現れている。現在進行中のアフガニスタンの内戦、旧ソビエトに属していた「共和国」間の紛争などもその類であろう。その結果、「戦争」は、十九世紀にヨーロッパの近代国民国家が想定していたものとは様相が異なり、益々陰惨なものに転化しつつあるのではないか。

日本株式会社と昭和軍閥

筆者はこのシリーズの(三)「前回の分」で、次のように述べて置いた。

『戦争に於ては、多くの場合、勝者は敗者を裁く。上記の論旨を承認すれば、勝者が敗者に説く「正義人道」がおよそ何者であるかは改めて云うまでもあるまい。我々は長い間「正義人道」とは関係の無い「勝者」の説く「正義人道」

を聞かされてきたことになる。筆者は、長い時間を掛けて、遅ればせながら、以上のことを「自覚」した。……何が善であり、何が悪であるかは「戦勝国が与える価値基準によつてではなく」我々が判定しようと主張しているのである。』（「内は今回の添付」）

明治以降我国の歩んできた「歴史」の「反省」は、極東軍事裁判のように昭和以降に限っていたのでは正鵠を期することは出来ない。林房雄の「大東亜戦争肯定論」ではないが、まさに百年戦争、幕末以来の西力の東漸の中での自己保全の歴史の面もある。ところで、この「百年」の歩の是非善悪を「分析」することは容易な業ではない。殆ど不可能に近いほどの難業である。しかし、日露戦争までは、その評価は、大体に於いて多くの論者の一致するところと見て良いようである。

一方、いわゆる「戦前」、昭和初期から昭和二十年までは「暗黒時代」と云うことになっている。尤も山本夏彦氏のように『「戦前」という時代は誤り伝えられている』と述べている人もいる。しかし氏自身がそれに引き続き『「戦前」という時代』はこれだけのことを言うために書いたが、何ぶん敵は幾万で私は一人だから長くなって申し訳ない』となつている。客観的事実かどうかは別として山本夏彦氏は自己を少数派と見ているようである。

仮に昭和史が「オカシク」なつたとしても、昭和になつて突然「オカシク」なつた訳でもあるまい。昭和初期は大正の続きであり、大正は日露戦争以後の継続である。「輝かしい」日露戦争以後「オカシク」なつた昭和初期まで、ほぼ三十年間、日本は「オカシク」かつたのか「オカシク」なかつたのか。

筆者は大正末期の生まれなので、山本夏彦氏同様とまでは行かぬが「戦前」に就いてある程度の実感はあるが、大正時代は自分で再構成しなければならぬ。それは他日に期することとして、自分にも分かりそうなこと、この時期に起源を持つ、悪名高い昭和軍閥に就いて考えてみる。

昭和軍閥は、大正十年十月二十七日のバーデンバーデンの永田鉄山、岡村寧次、小畑敏四郎の会合から始まると言われている。ところでこの会合の意図は、長州閥の打破もさることながら

『欧州大戦の結果を現地で体験し「戦争技術の高度化、複雑化、学問化及び戦争技術の国民化」の必要を意識し、同時にドイツ敗戦の教訓から総力戦体制の必要を痛感したのである。それに加えてロシア革命の成功は……陸軍の仮想敵国が純軍事的な目標だけにとどまらず「思想敵」としても立ち現れたことを意味していた（高橋正衛 二・二六事 件 中公新書）』

とある。軍隊が国家の安全を保証する任務を担う以上、上記のように考えるのは当然であつて何も不思議なことではない。寧ろ当時未だ若かつた筈の彼らがその様なことを考えたとすれば、当時の「上層部」が彼らを満足させるだけの具体的プランを提示できないでいたに相違ない。それらの「将官」達は何を考えていたのかと問いたいくらいである。此処にみられるのは西欧列強と比べて全体に於いて劣弱な日本の姿の自覚である。この文面からみる限りでは、

後にいわゆる昭和軍閥と言われる集団の一部や、「青年将校」に見られるファナチックな要素は微塵もない。このグループの指導的立場にあった永田鉄山が理知派と呼ばれ、後にファナチックな皇道派の相沢中佐に斬殺されたのは、悲劇ではあるが平仄は合っている。

ところで「彼ら」の意図したことを「真面目に」取り上げるならば、その解決は気の遠くなるような難事業である。先ず何処と戦う積もりなのか。再びロシア（ソ連）とか。日本は日露戦争に勝ったといっても、奉天会戦以後は「国力」は尽きかけていた。総力戦体制は何もバーデンバーデンの会合で始めて自覚されることではない。大砲の弾もままならない。第一線の将校は数も尽き掛け、資質も劣ってきている。戦費は外債で賄っていたがそれも限界に近い。そのまま続けば先のナポレオン、後のヒトラーと同様に日本も最終的敗北は必至だった（尤もロシアにもロマノフ王朝の存立基盤の動揺という危機は内蔵していたが）。勝ったような状態で講和に持ち込めれば上出来。従って日本海海戦には文字どおり「皇国の興廃」が掛かっていたのである。日本は一国で勝ったのではなく、夫々の「国益」に従う迷惑があつたとしても、英、米の援助によつた部分が大きい。しかも「今や」その英、米もまた仮想敵国になり掛かっている。

大正十年は日露戦争後十六、七年経っている。その間に日本の国力はどうなったか。およそ近代戦を行うに必要なハード面の問題はどうか。この大正十年より更にほぼ二十年後、昭和十六年、後の佐々木日銀総裁を含む当時の若い官僚達が、上司の命により、日米戦のハード面でのシュミレーションを行っているが、そのときも必敗と出ている。

〔内閣直属総力戦研究所・第一回総力戦机上演習第二期演習状況及び課題 猪瀬直樹・昭和十六年夏の敗戦・文春文庫〕
このことは大正十年でも「理知的」に考えればある程度予見できたのではなからうか。

話は変わるが、必敗を予見して、「国家」の基本的方針を変えた例はある。ソ連の解体である。本シリーズの(一)でも触れたが、ゴルバチョフ前大統領はハードの面でもソフトの面でも、また国家体制に於いても、アメリカとは太刀打ちできない、このまま冷戦を続ければ、自国は破産することを予見し、冷戦を打ち切った。彼はそれによるソ連の再生を意図したのであつて、解体は予想していなかったと思われる。しかし何れにせよ、「国家」の基本的方針の大転換を行った。「当時」の日本で言えば、満州の全権益の放棄、よりも激しい政策であろう。「当時」の日本でそれを行ったらどの様になっていただろう。ゴルバチョフ時代、副大統領ヤナーエフ等がクーデターを起こし、エリツイン大統領がハズブラートフ前議長、ルツコイ前副大統領等の潜む「国会」を砲撃したが、起こり得たであろう「日本の混乱」を想定すれば(此処で想定した文脈との関連は微妙だが、日本では二・二六事件が起こっている)、まだまだ静かなくらいで、別に驚くほどのことではない。筆者は別に不謹慎なことを云っているのではない。「国家」の基本的方針の転換が如何に困難な事業であるかを述べているに過ぎない。

「時代」も、科学技術の進歩も、国際間の意識も、「現在」とは全く異なる大正期や「戦前」、日本に方針転換は出来たであらうか。バーデンバーデンのテーゼは、実は日本が漸く国益を前面に立てて角逐する国際場裡に登場したこと

を意味する。「春秋に義戦なし」と云う、その「戦い」が、平和裡に行われている。日本の「方針の転換」は恐らくわが民族発展の閉塞を意味するだろう。則ち、それは出来ない。では進むしかない。ところで、それは殆ど不可能に近い。結果からみれば、それは敗亡への路だったのだから、当然その機運に反対する者が出る。しかし反対論者もまた、展望を持ち得ない。強行は、国際的にも、国内的にも無理を生ずる。「戦前」は暗かったかどうかは別として、緊張が高まる。「戦前」はやはり非常時であった。平常時ではなかった。

何時の時代も、何処でも「憂国の志士」（兼権力志向者）は居る。昭和一桁時代に入ると、「彼ら」は、上記の様な気質を持つ革新官僚と結び、計画経済に傾斜し、全体主義的国家体制に入る。合目的行為をするには計画的であることが最も効率が良いからである。全体主義的と言っても直ちにいわゆるファシズムと即断してはいけない。計画的であることは社会主義の特徴である。当時非軍部の権力上層部に、「彼ら」及び革新官僚（この場合革新官僚は、現在の観念では「右派」である）を「赤」と警戒する気風があった。

「軍閥」に属する軍人は多数いたであろうが、軍事技術者の域を越えて国家全体の運行に就いてのマスター・プラン（らしきもの）を持っていたのは前述の永田のほか石原莞爾、武藤章ぐらいではないだろうか。しかも石原莞爾は熱心な日蓮宗の信者と聞く。永田、武藤は中国一撃論者。正に、止んぬる哉、である。

何れにもせよ「軍閥」は殆ど独裁的な巨大な権力機構を形成した。しかし独裁的な権力機構は例外なしに必ず腐敗する。力を持った機構が「腐敗」すればその害毒は制限がなくなる。結果は歴史の示すとおりである。筆者が「腐敗」と云うのは、俗に云う権力腐敗ではない。合理的思考の閉塞である。これが致命的である。

筆者は「彼ら軍閥」を思うとき、戦後の所謂通産官僚（だけではないが）と重ね合わせて考えざるを得ない。両者は共に富国強兵を目指し、官僚主導型か、官民協力型かは分からぬが、ともかく官僚（軍人も官僚の一種である）の介入により、国運の向上を願った。後者は、「日本株式会社」の根幹としてその功を称えられ、前者に対する評価は周知の通りである。戦後の所謂通産官僚に、富国はともかく強兵はそぐわないようだが、たまたま戦後はそれをアメリカに任せたままでのことで、もしそれが存在すれば、曾っての「革新官僚」の後身として、彼らも必ずや強兵も図ったことであろう。閑話休題。前者は失敗し、後者は成功した。その差は殆ど与えられた条件の有利、不利に尽きるように思われる。

前者が横暴であり、傲慢であったとしたら、後者もまた同断である。平成六年初頭、郵政省の一局長がハイビジョンのデジタル化に就いて発言し、世論の反撃にあい、直ちに前言を否定した。彼もまた国を思つての発言であり、同時に、ルイ十四世のような、朕は国家なり、との潜在意識があつたであろう。高級参謀と変わるところはない。

「彼ら軍閥」の評価に就いての当方の私見はおよそ以上の通りである。則ちこの項を「日本株式会社と昭和軍閥」と

題した所以である。

戦後思潮考究「序説」(四)